

公表	児童発達支援事業所における自己評価総括表
----	----------------------

○事業所名	寺子屋オレンジキッズ		
○保護者評価実施期間	2025年 11月 1日 ～ 2026年 10月 31日		
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	43	(回答者数) 34
○従業者評価実施期間	2025年 11月 1日 ～ 2026年 10月 31日		
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数) 6
○事業者向け自己評価表作成日	2025年11月26日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的にやっている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	児童が安心して過ごせる環境・体制（十分なスペースと柔軟な職員配置、わかりやすく構造化された環境）が整っていること	個別室とプレイルームで活動を分け、プレイルーム内もパーテーションやマットで区切ることで、活動ごとのスペースを確保している。 こどもに見通しが立ちやすいように、活動の流れや約束を掲示し、構造化された環境づくりを意識している。 子どもの状態に応じて職員が柔軟にサポートへ入る体制を取り、国の基準以上のスペースと人員を確保するようにしている。	感覚過敏・注意の偏りなど個々の特性に応じて、照明・音・視覚刺激の量をさらに調整できるよう、環境チェックリスト等を用いて定期的に見直す。 利用状況の変化に合わせて、定員と人員配置のバランスを定期的に振り返り、ピーク時間帯のサポート体制をより細かく調整していく。
2	一人ひとりの特性や保護者の意向を踏まえた個別支援計画と、多様な活動プログラムによる質の高い支援が提供されていること	アセスメントを通してこどもと保護者のニーズ・課題を整理し、それに基づいた児童発達支援計画を作成している。 保護者アンケートや面談を定期的に行い、その意見を計画や日々の支援内容に反映している。 個別活動と集団活動をこどもの状態に応じて柔軟に組み合わせ、無理のない参加の仕方を一緒に考えている。 活動プログラムが固定化しないよう、職員全員でアイデアを出し合い、日々内容を変えながら、特性に合った活動になるよう工夫している。	児童発達支援計画の振り返りについて、保護者と共有する機会（半年ごとの面談など）を一層位置づけ、「できるようになったこと」「今後のねらい」を分かりやすく説明する。 支援のねらいと家庭での関わり方を簡潔なプリント等に整理し、保護者が家庭でも取り組みやすい形で情報提供する。 職員研修や外部研修を活用し、発達特性や支援方法に関する専門性を継続的に高めていく。
3	保護者への説明・日々の情報共有、安全面の配慮が丁寧であり、総合的な満足度が高いこと	見学・契約・面談の場で、運営規程、支援プログラム、利用者負担等について丁寧に説明し、質問にも個別に対応している。 送迎時の口頭でのやり取りに加え、連絡ノートや「お子様の様子」の配布物を通して、こどもの様子や活動内容を定期的に共有している。 事故・けがが発生した際には、状況の説明と対応について速やかに連絡する体制を整え、安全確保のためのマニュアルや避難訓練を継続して実施している。	情報共有の手段（紙・口頭・オンライン等）について、保護者の希望を確認し、家庭の状況に合わせた柔軟な連絡方法を検討する。 事故・ヒヤリハットの振り返り内容を職員間で共有し、保護者にも分かる範囲で改善点を発信することで、安全対策への安心感をさらに高める。 新規利用時に加え、年度の切り替え時にも改めて「事業所の方針」「支援の流れ」を説明し、見通しの持ちやすい関係づくりを行う。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者同士の交流の機会が十分とは言えないこと	昨年度までは保護者会や交流の場を設けていたが、参加希望が減少したことから、今年度は実施を見送っており、継続的な場の設定が途切れている。 家族支援プログラム（ペアレントトレーニング等）や家族向け研修・情報提供について、日常の個別相談での対応が中心となり、体系的なプログラムとしてはまだ十分に構築できていない。	保護者アンケートや面談で「どのようなテーマ・時間帯なら参加しやすいか」「どんな形の交流があると嬉しいか」を改めて聞き取り、ニーズに合った家族支援プログラムを企画する。 小規模・短時間から始められるお話し会やオンライン相談会など、参加しやすい形式での保護者会・勉強会を試行し、継続の仕組みを作る。
2	児童発達支援センターや保育所・幼稚園等、外部機関との定期的な連携は行っており、各関係機関がどのような困りごとを持っていたり、またどのような支援を行っているのか十分に把握できていない可能性があること	児童発達支援センターや専門機関からの助言を受ける機会が体系的に確保されておらず、職員が外部視点を取り入れて支援の質を見直す場が限られている。 保護者評価でも、「他のこどもと活動する場」「他事業所との交流」については肯定的な回答がある一方で、十分とは感じられない層が一定数いる。 保護者の方から「園との連携を図ってほしい」と言われた際には必ず連携をとるようにしているものの、定期的な連携は行っていないため、日々の細かな部分まで把握できているのが不明である。	個別のケースについて、必要に応じてセンターや専門職に相談し、助言内容を事業所内で共有する仕組み（ケース検討会等）を整える。 他機関との連携や専門家助言の内容を、保護者にも分かりやすく伝え、「複数の視点でこどもを支えている」という安心感につなげていく。
3	日によって、支援前後の職員間の情報共有や役割分担の明確化、支援の振り返りが十分に行えないことがあること	ミーティングや打ち合わせの回数は多く、情報共有の時間は十分に確保しているが、それでも人間的な「言ったつもり・聞いたつもり」による漏れが発生している。 情報共有の質は職員の経験や個人のスタイルに左右される部分があり、「誰が担当でも同じ深さ・視点で共有される」レベルの標準化には至っていない。 日々の業務量や送迎・支援準備が重なる時間帯では、どうしても「急ぎの対応」が優先され、重要度の高い情報ほど口頭のみで流れてしまう場面がある。	ミーティングの頻度を増やすのではなく、「何を共有すれば漏れを防げるか」を明確にした標準チェックリスト（例：①健康・服薬の変化 ②行動面の変化 ③学校・園・他機関連絡 ④保護者からの要望 ⑤安全面の気になる点）を作成し、誰が進行しても同じ項目を必ず確認する。 「情報の漏れ」や「伝わりきらなかった事例」が出た場合、個人のミスとして終わらせず、短時間のミニ振り返りフォーマット（原因／どの仕組みで防ぐか／誰がいつまでに対応するか）を使って、その都度小さくルールやチェックリストに反映していく。 会議の種類を「①日々の支援共有」「②ケース検討・専門性の話し合い」「③安全・運営・ヒヤリハット」と目的別に整理し、それぞれの場で扱うテーマとアウトプット（決めること・記録すること）を明確にして、情報が埋もれないようにする。